

3. I 黒層の土器について

(1) アヨロ 3 類 a と併行する土器群 (図 X-2)

F-41 からアヨロ 3 類 a と併行する深鉢が出土した。この焼土の付近にある F-37 からは後北 A 式深鉢が 1 個体出土し、周囲の包含層からも後北 A 式深鉢が 1 個体出土した。現在までのところアヨロ 3 類 a と後北 A 式の並行関係は、江別太遺跡 (1979 年)、旧豊平河畔遺跡 (1981 年) の調査によって確定されており、今回の調査例は 3 例目となるものである。

本遺跡の例はその関係のどのあたりに位置付けられるのだろうか。先の 2 例のアヨロ 3 類 a には形態上から新旧は見い出せない。江別太遺跡のアヨロ 3 類 a はⅢ 3 層出土で、伴出したのは貼付帯が突起下のみにある江別太 2 式 (高橋分類の I 群 2 類 a) であり、後北 A 式祖型である。旧豊平河畔遺跡のアヨロ 3 類 a は 1 号住居出土で、伴出したのは貼付帯が横環しており江別太 3 式 (高橋分類の I 群 1 類でⅢ 1 層相当) であり、後北 A 式である。

F-37 の深鉢は、貼付帯が 4 本横環し、突起下に 4 個の V 字貼付文を付け、突起間に小さな V 字貼付文をつけている。器面に対して角度が深い三日月形の刺突が浅く付けられ、横位の押し引き文がある。このような特徴は、江別太遺跡の後北 A 式 (I 群 1 類) には見られず、後出的な要素である。

一方、F-41 出土の深鉢は器形・文様構成は先の 2 例と同じであるが、区画文様は異なる。2 段の波状帯縄文の波裾と波頂と交わる部分に、斜行縄文で菱形をつけ、その帯縄文を刺突で区画している。器面に対して鈍角に刺突しているため短い押し引き文のようにも見える。

以上より、先の 2 例と F-41 のアヨロ 3 類 a と F-37 の後北 A 式の関係は下記ようになる。

江別太遺跡Ⅲ 1 層→旧豊平河畔遺跡、1 号住居→ユカンボシ C 15 遺跡、F-41・37

波状帯縄文を沈線で区画しない類例として次の 2 例がある。これらはいずれも後北式系の器形である倒鐘形を呈し、F-41 の例とは異なる。北広里 3 遺跡包含層とフゴッペ洞窟層位不明の例である。

北広里 3 遺跡包含層の例は、3 段のやや直線的な波状文の波裾と波頂とが交わる部分に、縦位沈線文をつけ、その帯縄文を刺突で区画している。ほかに包含層からはアヨロ 3 類 a 深鉢片が出土している。1 号住居からは貼付帯が突起下にあり、横位沈線・斜沈線・鋸歯状沈線を多用する江別太 1 式 (高橋分類の I 群 2 類 b) の深鉢が出土している。

アヨロ 3 類 a の影響が、北海道中央部においては江別太 1 式～後北 A 式にかけてあり、文様構成の影響、器形・文様構成の影響にまで及んでいることがわかる。

(2) 後北 A 式深鉢の変遷 (図 X-3)

江別太遺跡の I 群 1 類は旧豊平河畔遺跡の後北 A 式に近接し、旧豊平河畔遺跡→F-37 という関係が判明した。これに拠って遺跡とその周辺の資料を用い、後北 A 式の編年を試みる。

江別太遺跡の江別太 1・2 式深鉢は下記のように変化する。

突起下口唇部：縦位棒状貼付文→縦位棒状・V 字状貼付文

頸部文様：鋸歯状・斜沈線文+区画文 (押し引き状刺突・沈線)→斜沈線文+区画文 (刺突)

旧豊平河畔遺跡の後北 A 式は下記のようなものである。

突起下口唇部：縦位棒状貼付文 頸部文様：鋸歯状・斜沈線文+区画文 (刺突)

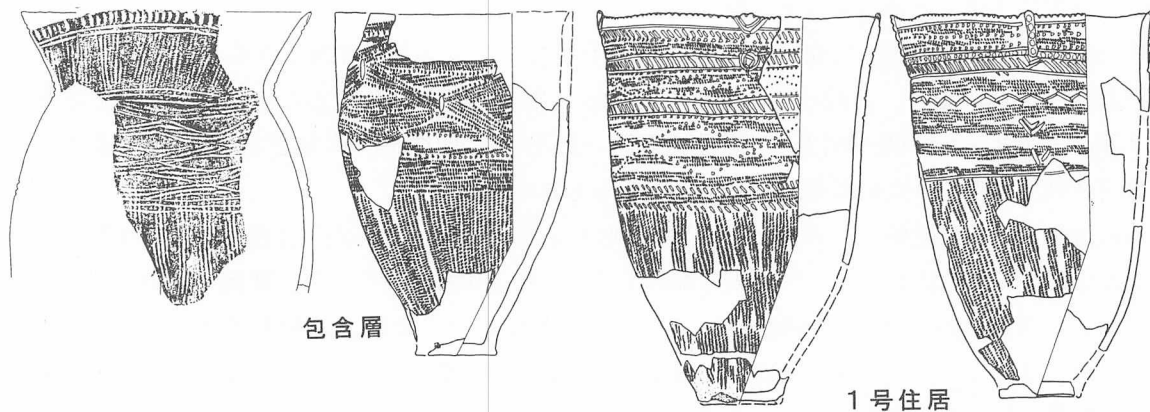
これらの特徴は、突起下口唇部直下に縦位棒状・V 字状貼付文があること、頸部文様が带状縄文とは別に区画文 (押し引き状刺突・刺突) を伴う鋸歯状・斜沈線文があることである。江別太 1 式→江別太 2 式→旧豊平河畔遺跡の後北 A 式への変化は非常に漸移的である。

江別太遺跡の後北 A 式深鉢は、突起下貼付帯の施される位置が 2 種類あり、下記のようなものである。

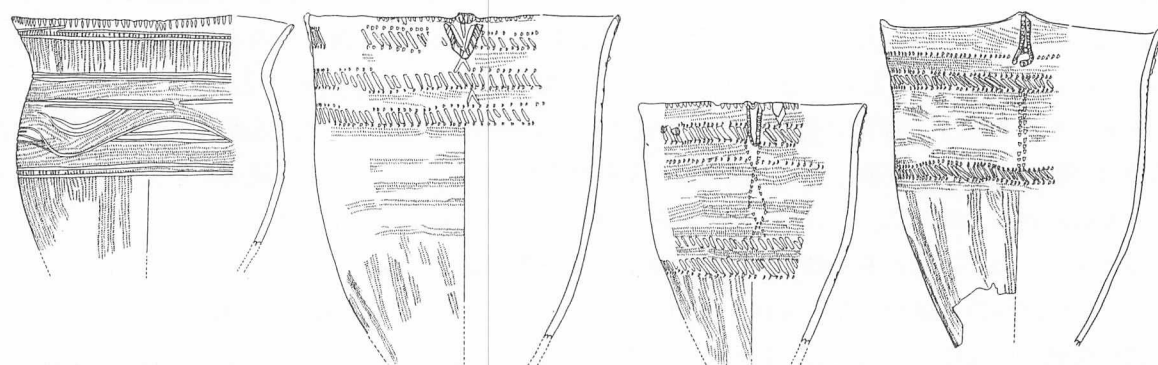
突起下口唇部：狭角 V 字状貼付文 突起下横位貼付帯下：V 字状貼付文+縦位棒状貼付文

北広里遺跡

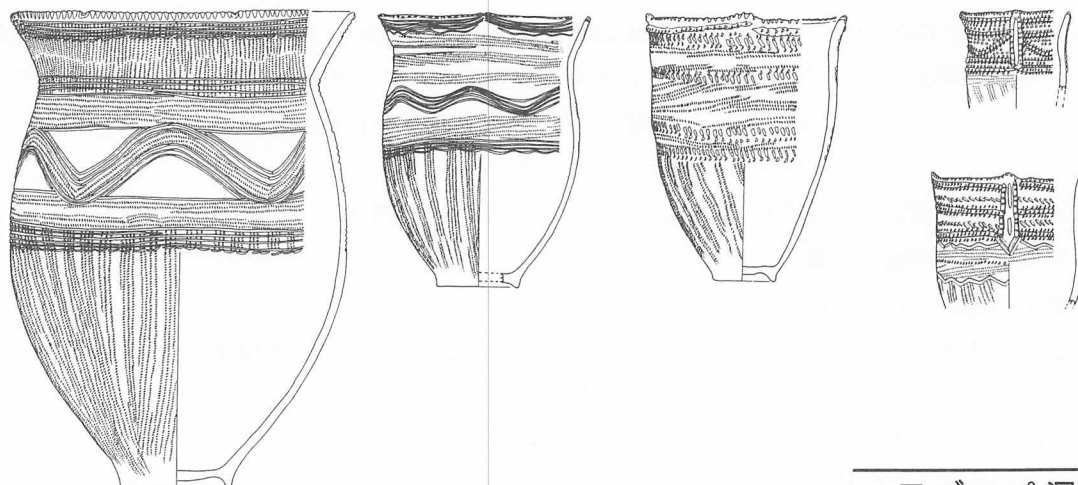
(S = 1 / 6)



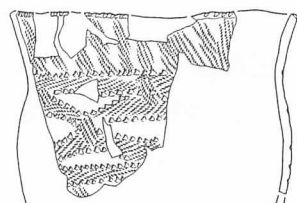
江別太遺跡Ⅲ 3層



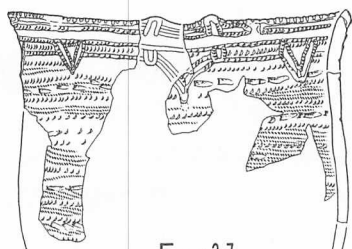
旧豊平河畔遺跡 1号住居



ユカンボシ C15 遺跡

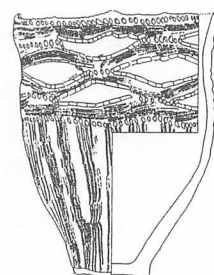


F-41



F-37

フゴッペ洞窟



図X-2 アヨロ3類aと併行する土器

頸部文様：帯縄文、間隔のあかない帯縄文+区画文（押し引き状刺突）

F-37の後北A式深鉢は、突起下横位貼付帯下にV字状貼付文、その脇に短い縦位棒状貼付文、頸部文様は間隔のあかない帯縄文+区画文（刺突）、その間に横位押し引き文がある。

これらの特徴は、江別太遺跡の後北A式深鉢は突起下口唇直下に貼付帯があるものが先駆的要素を持ち、突起下横位貼付帯下にV字状貼付文+縦位棒状貼付文があること、頸部文様が間隔のあかない帯縄文+区画文（押し引き状刺突・刺突）は後出的要素を持つ。江別太遺跡の後出的要素を持つものに較べるとF-37の後北A式深鉢はより後出的である。

ユカンボシC15遺跡包含層、オサツ2遺跡土坑墓（GP-5）の後北A式深鉢は下記の様である。

突起下横位貼付帯下：V字状貼付文+縦位棒状貼付文、菱形状貼付文+縦位棒状貼付文

頸部文様：間隔の空かない帯縄文とその上に横位押し引き文+区画文（刺突）

これらの特徴は、横環する貼付帯の本数が増えて突起下の貼付帯文様がより下部に付くように見えること、V字の角度が開きV字状には見えなくなること、菱形貼付文が出現すること、帯縄文とその上に横位押し引き文があることである。

オサツ2遺跡土坑墓（GP-2・6）の後北A式深鉢は下記のようなものである。

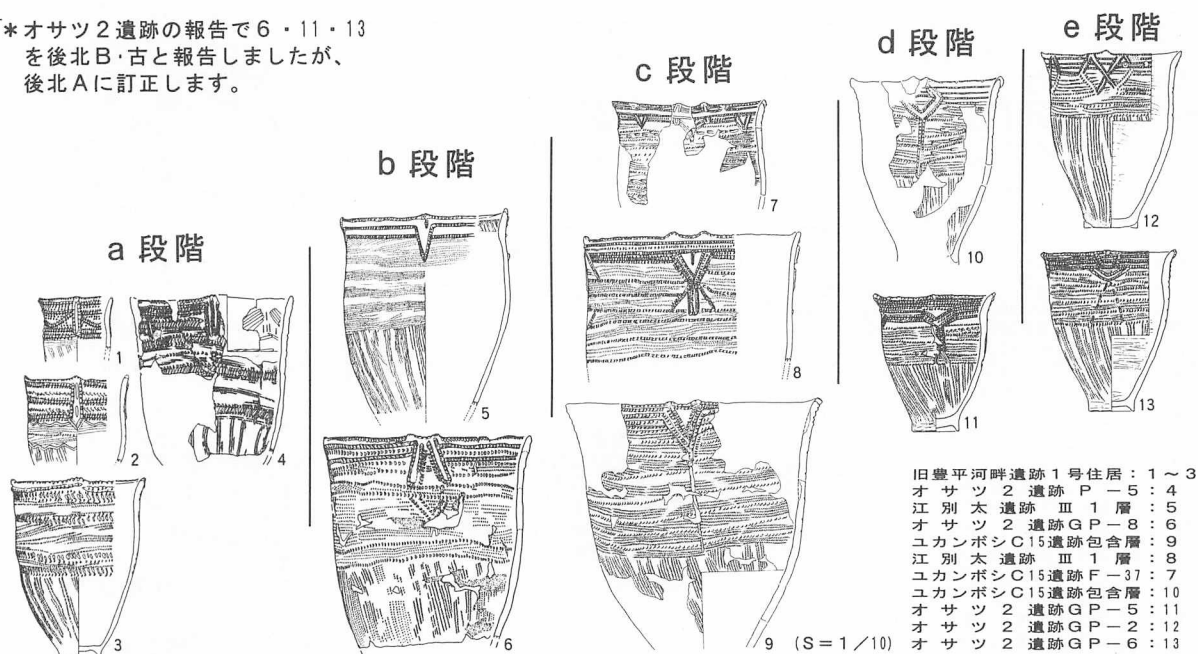
突起下横位貼付帯下：V字状、菱形状貼付文 頸部文様：帯縄文と刺突列を交互に施す。

これら特徴は刺突が区画文としてではなく、文様帯に変化して存在することである。

以上の特徴をまとめると次のような土器群が成立し、 $a \rightarrow b \rightarrow c \rightarrow d \rightarrow e$ と変遷する。

- a：突起下口唇部直下に縦位棒状・V字状貼付文、頸部文様に带状縄文とは別に区画文（押し引き状刺突・刺突）を伴う鋸歯状・斜沈線文。
- b：突起下口唇直下に貼付帯、頸部文様に間隔の空く帯縄文+区画文（押し引き状刺突・刺突）
- c：突起下横位貼付帯下にV字状貼付文+縦位棒状貼付文、頸部文様に間隔の空かない帯縄文+区画文（押し引き状刺突・刺突）。
- d：横環貼付帯の本数が増え、菱形貼付文が出現すること、帯縄文とその上に横位押し引き文
- e：刺突が帯縄文の区画文としてではなく、独立した文様帯として存在する。

*オサツ2遺跡の報告で6・11・13
を後北B・古と報告しましたが、
後北Aに訂正します。



図X-3 後北A式の変遷

(3) 後北 C₂・D 式の分類案 (図X-4・5、表X-1・2)

下記の2点の問題から変遷を考慮する必要がある。

1: 後北 C₂・D 式深鉢 (図V-25-13) と北大 I 式深鉢が F-1 から出土している。この後北 C₂・D 式深鉢は終末期のどの時期にあるのか。

2: 後北 C₂・D 式無文深鉢 (図Ⅶ-3-15) と深鉢? (図Ⅶ-2-14) が出土しており、とくに無文土器の編年上の位置付けが不祥である。

後北 C₂・D 式の編年は大沼 (1982年) の4段階案があり、「初め」・「一般的」・「後葉」・「末」を設定し、さらに上野 (1987年) は札幌市 K 135 遺跡の出土状況と文様構成から「一般的」を古と新に細分した。大島 (1990年) は小樽市蘭島餅屋沢遺跡の土器を文様構成から I 類・II 類・III 類・IV 類・V 類に細分し、I 類→II 類・III 類→IV 類→V 類の変遷を提示している。大沼案との関係は述べられていないが、I 類は「初め」、II 類は「一般的」、III 類は「後葉」、IV 類・V 類は「末」に対応していると思われる。

細分の主な方法は、「一般的 (古)」・「一般的 (新)」が層位的事実にもづく以外は、遺跡内における同一文様構成を持つ土器群の抽出を細分単位としたものである。

私案は、同一文様構成を持つ土器群の抽出を基本とし、文様構成を系統別に分類して、K 135 遺跡の層位的事実を考慮したものである。無文化や終末に至る経緯を考察するには対象資料を道央地域のものとし、均質な条件を設定するのがよいとおもわれる。対象時期は「一般的 (古)」～「末」とする。文様構成を系統別に分類する上では上野 (1987年) や林 (1988年) が参考になった。分類要素の抽出は表 X-1・2 に示したとおりである。私案は大・中型深鉢に適用できる。小型深鉢、注口付き深鉢、注口、皿、ミニチュア土器は文様帯の圧縮・単位の欠落があるため当てはめるのは最適でない。

区画文様は文様割付けの基線である。区画文 I は波頂から下る縦位帯状縄文で、平縁になるとほとんど消滅する。区画文 II-1 は横環する「上帯」・「中帯」・「下帯」3本で、区画文 II-2 は「上帯」・「下帯」2本の帯状縄文である。それらにより器面は縦横に区画される。区画文 II-1 の場合は帯間が上下2区画あり、上側を「帯間1-1」、下側を「帯間2」と呼ぶ。区画文 II-2 は一つで「帯

表 X-1 後北 C₂・D 式深鉢の分類(1)

I a	円形文を縦位帯と中帯の交点に、その両側に紡錘形文を配置。
I b	円形文を縦位帯と中帯の交点に、その両側に上下に開く横位弧形を配置。
I c	円形文を縦位帯上の帯間1-1に配置。
I d	円形文を縦位帯上の帯間1-2に、他の文様を上下2段に配置。
II a	紡錘形文を縦位帯と中帯の交点に、その両側に上下に開く横位弧形を配置。
II b	紡錘形文を縦位帯上の帯間1-1や2に配置。その両側に上下に開く横位弧形を配置。
III a	逆・括弧文を縦位帯と中帯の交点に配置。
III b	逆・括弧文を縦位帯上の帯間1-1に配置。
III c	逆・括弧文を縦位帯上の帯間1-2に配置。
IV	菱形・六角形文を縦位帯上の帯間1-2の上下2段に配置。
V a	連弧文を波頂下の帯間1-2の上下2段に配置。
V b	連弧文を波頂下の帯間1-2に配置。
VI a	U字形文を縦位帯上の帯間1-1に配置。
VI b	U字形文を縦位帯上の帯間1-2の上下2段に配置。
VI c	U字形文を縦位帯上の帯間1-2に配置。
VII a	V字形文を縦位帯上の帯間1-2に配置。
VII b	V字形文を波頂下の帯間1-2に配置。
VIII a	山形文を波頂下の帯間1-2に配置。
VIII b	山形文を波頂下の帯間1-2に、口縁部に円形刺突文に配置。
VIII c	山形文を波頂下の帯間1-2に、口縁部に円形刺突文、頸部が括れて口縁端面が水平に。
IX a	縦位帯上に縦位帯状縄文を付し、横位帯状縄文が多数配置される。
IX b	横位帯状縄文の数が少ない。縦位帯状縄文と横位帯状縄文が交差する。
IX c-1	横位帯状縄文の数が少なく縦位帯状縄文が横位帯状縄文を分断する。口縁端面が水平に。
IX c-2	横位帯状縄文の数が少なく縦位帯状縄文が横位帯状縄文を分断する。口縁部に円形刺突文、頸部が括れて口縁端面が水平に。
X a	横位帯状縄文が多数配置される。
X b-1	横位帯状縄文の数が少ない。
X b-2	横位帯状縄文の数が少なく、口縁端面が水平に。
X b-3	横位帯状縄文の数が少なく、頸部が括れて口縁端面が水平に。

区画帯 II-1
(上中下横位帯)

充填文様 I-1

区画帯 I (縦位帯)

区画帯 II-2 (上下横位帯)



充填文様 I-2

区画帯 I (縦位帯)

K 135 遺跡出土を引用(1987年)

図 X-4 文様帯の説明

間1-2」と呼ぶ。

充填文は縦位帯上や帯間に施される。充填文Ⅰ-1・充填文Ⅰ-2（Ⅷc-1、Ⅷc-2を除く）の名称は区画文Ⅰ上や波頂下の位置にある単位として見たときの命名である。充填文Ⅰ-1は区画文Ⅱ-1の中帯上と帯間に付される。充填文Ⅱ-2は区画文Ⅱ-2の帯間に主に付される。

充填文の円形文と紡錘形文との違いはつぎのとおりである。円形文を描くときには、短い単位で3度以上原体を回転させているもので、1度の弧の曲率が大きく真円が描ける。紡錘形文を描くときには、長い単位で2度原体を回転させているもので、1度の弧の曲率が小さく真円が描けず、弧形となる。それを横位上下に合わせて閉じている。

括弧文・逆括弧文は「()」と「) (」があり、弧形2個を縦位に描くもの。紡錘形文を90°回転させたものと解釈できる。紡錘形文との違いは、弧と弧のあいだが空いて充填文Ⅱが入ることである。

菱形・六角形文は、横位に展開する弧形の重複が、上下に配置されて生じる文様である。

連弧文は、横位に展開する同じ向きに開いた弧形が、重複せず配置されて生じる文様である

U字形文は、弧形の曲率が極めて大きくかつ連続せず、上向きに開いた文様である。

V字形文は、U字形文が直線化した文様。

山形文は、V字形文が上下反転した文様。

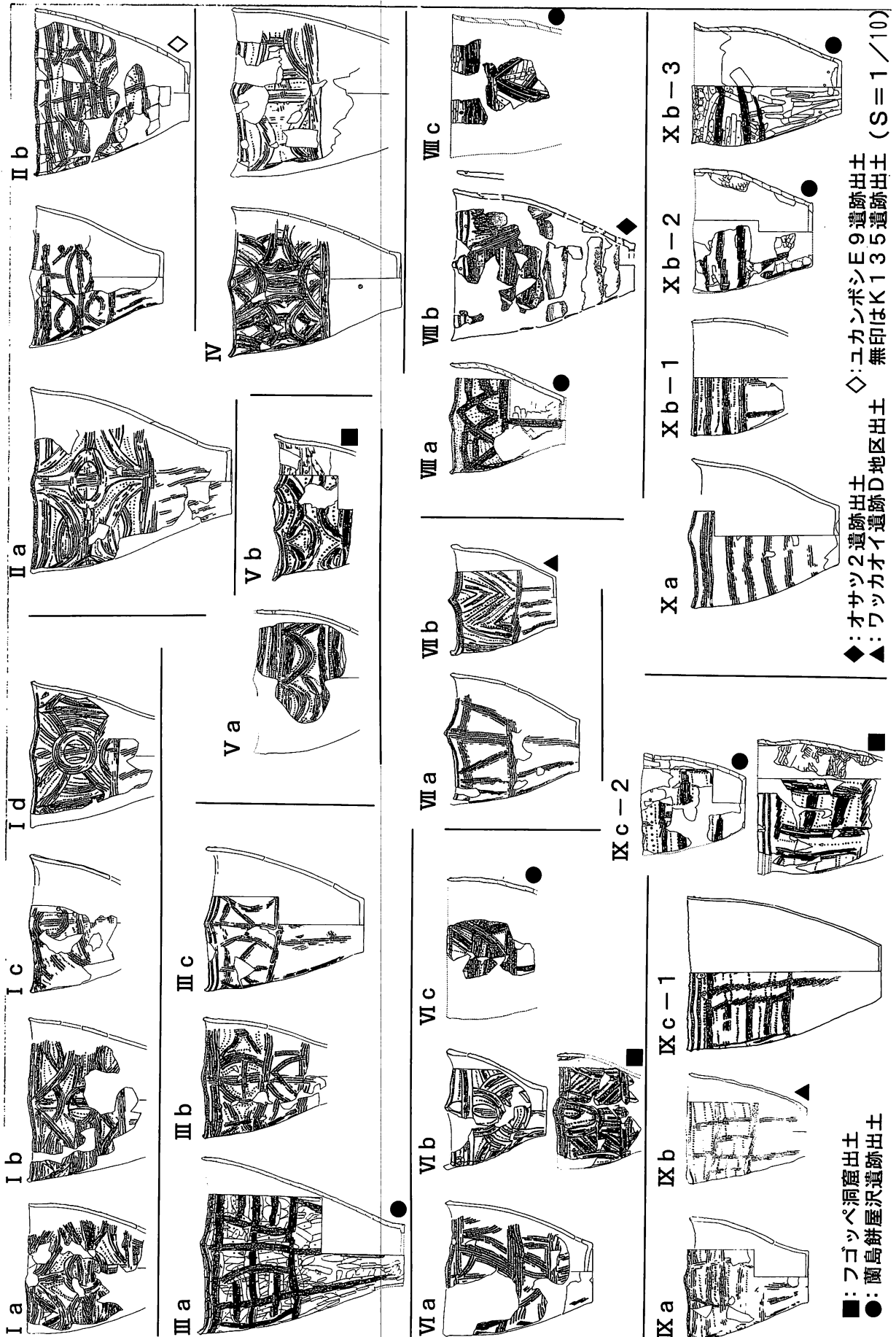
充填文Ⅱは充填文Ⅰの中に更に充填する文様である。充填文Ⅱの中に長・短縦位帯状文とあるが、「長」は段内いっばいに伸びているもの、「短」は段内で途切れるものである。なお区画帯のないものは充填文という概念もないのだが、充填文Ⅰ以外という定義も含めて仮りに充填文Ⅱの欄に置いた。

胴部下半より右側の項目は文様構成以外の要素を示した。文様構成以外の要素は大まかな目安であり、ある文様構成を持つ土器はこのような形態等を持つ傾向にあるということを示している。

「●」はその項目が当該することを示し、「○」はその項目が少例当該することを示し、「(●)」は充填文Ⅱの項目において「●」に対して副文様となることを表す。「-」をは不明を表す。

表X-2 後北C₂・D式深鉢の分類(2)

区画文様 文様Ⅰ	区画文様		充填文様											胴部下半	口縁部文様	口縁形態	口縁断面	口頸部	胴部	上（ 1987 年） 類																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
	区画文様Ⅱ-1	区画文様Ⅱ-2	充填文様Ⅰ-1			充填文様Ⅰ-2		充填文様Ⅱ																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																
	縦	横	位	上	中	下	帯	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間								帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間	帯間



図X-5 後北C₂・D式深鉢の分類

(4) 後北 C₂・D 式深鉢の変遷 (図 X-6)

後北 C₂・D 式深鉢の文様構成の変化は、文様帯の縮減に第一の原因があり、平縁化に第二の原因がある。それは、区画文Ⅱ-1が区画文Ⅱ-2に変化して帯間が減少し、器面の分割が単純化することであり、区画文Ⅰが波頂から下るため平縁になると様割付けの基線となりえなくなることである。

1) このような区画文の変化を受けて充填文Ⅰの施文位置も変化する。

Ⅰ：縦位帯と中帯の交点→縦位帯上の帯間1-1→縦位帯上の帯間1-2の上下2段に

Ⅱ：縦位帯と中帯の交点→縦位帯上の帯間1-1や2

Ⅲ：縦位帯と中帯の交点→縦位帯上の帯間1-1→縦位帯上の帯間1-2

V：波頂下の帯間1-2の上下2段→波頂下の帯間1-2

Ⅵ：縦位帯上の帯間1-1→縦位帯上の帯間1-2の上下2段に→縦位帯上の帯間1-2

Ⅶ：縦位帯上の帯間1-2→波頂下の帯間1-2

Ⅷ：縦位帯上の帯間1-2→波頂下の帯間1-2→帯間1-2

充填文Ⅰ自体の変化(発生)もおこる。

Ⅱ：Ⅰが偏平になったもの。Ⅲ：Ⅱの両端が欠失し90度転回したもの。

Ⅳ：Ⅰ～Ⅲの充填文Ⅱ(長短弧形)が充填文Ⅰに転じたもの。

V：Ⅳの両端が重複しなくなったもの。Ⅵ：Ⅰの上部が欠失したものであろう。

Ⅶ：Ⅵが直線化したもの。

Ⅷ：Ⅶが180度転回したもの。

区画文の変化が停止すると充填文Ⅰ自体にも変化はなくなり充填文Ⅱに変化が目立つ。例えば、Ⅷの充填文ⅡはU・V字形文や山形文や横位帯縄文→縦位帯縄文→短斜位帯縄文と変化する。

2) 充填文Ⅰ系として定義(充填文Ⅰの欠落?)できないⅨ・Ⅹは横位帯縄文の本数に変化がある。

Ⅸ：突起下に縦位帯縄文、横位帯縄文が多数→縦位帯縄文と横位帯縄文が交差、横位帯縄文の数が減少(3～5本)→縦位帯状縄文が横位帯状縄文を分断、横位帯縄文の数が減少

Ⅹ：横位帯状縄文が多数→横位帯状縄文の数が減少(3～5本)

3) 平縁化はd段階に目立ちはじめ、同時に口縁部の形態変化が目立ち、口縁部文様に円形刺突文が加わる。付加される順序は、「円形刺突文→+口縁端面が水平→+頸部が括れる」である。

	a段階	b段階	c段階	d段階	e段階	f段階
	縦位帯・中帯の交点	縦位帯上の帯間1-1	縦位帯上の帯間1-2に上下2段	縦位帯上の帯間1-2	波頂下の帯間1-2	帯間1-2 端面水平・頸部括れ
I a						
I b						
I c						
I d						
II a						
II b						
III a						
III b						
III c						
IV						
V a						
V b						
VI a						
VI b						
VI c						
VII a						
VII b						
VIII a						
VIII b						
VIII c						
				二重線の左側はK135遺跡のⅦ1群に、右側はⅦ2群にほぼ対応する。		
			横位帯縄文・多		横位帯縄文・減少	
IX a						端面水平
IX b						端面水平・頸部括れ
IX c-1						
IX c-2						
X a						円形刺突
X b-1						
X b-2						
X b-3						円形刺突

図 X-6 後北 C₂・D 式深鉢の変遷

(5) ユカンボシ C 15 遺跡の後北 C₂・D 式土器

F-1 の深鉢 (図 V-25-13) は、口縁端面が水平で、頸部が括れることから、X b-3 であり終末期にあたる。F-1 周囲の深鉢 (図 VII-2-14) は器高が低く、注口付き深鉢の可能性もあるの
 で確実ではないが、口縁部の形態、頸部が括れないことから IX b であろう。無文の深鉢 (図 VII-3-15) は、平縁に小突起が付き、口縁端面を持ち、水平気味で、頸部が括れないことから、e 段階後半～f 段階前半に位置付けられる。

(6) 北大 I 式と VI 群 c 類無文土器について (図 X-7)

北大 I 式の細分は大沼 (1982・89・97 年) の二分案があり、内容は同じ段階を指していると思われる。「(古)」は口唇が角形、体部に帯状縄文や右下がり斜行縄文が施され隆起線や刺突により縁取られる。北海道大学構内ポプラ並木東地区遺跡を標識遺跡とする。「(新)」は口唇が丸みを持ち、口縁部が外反する。底部は厚くなり外へ張り出す。体部に斜行縄文。江別市吉井の沢遺跡を標識遺跡とする。

吉井の沢遺跡の中で「(新)」の定義よりも古相を示す土器があり、「(新)」「(古)」の中間に当たるものがある。口唇が角張って端面を持ち短い口縁部が外折し口縁径を増すが口縁径が著しく肩部径を凌駕することはない。これをもって「(新)」を b 段階と c 段階に二分し、「(古)」を a 段階とよぶ。

本遺跡の土器 (図 V-25-12、26-18、図 VII-3-16、図 VIII-4-41) は頸部が括れが弱いのでポプラ並木東地区遺跡の土器よりも一時期古い形態を示す。現時点では a 段階の初めと位置付けられる。

フゴッペ洞窟で d から f 段階前半に当たる無文の深鉢とフゴッペ式が上層から出土している。フゴッペ式は太めの貼付帯を口縁部に縦横に付けること、口縁部の断面が角形であることから、a 段階に近い要素を持っている。前後関係の精査は必要であるが北大 I 式の祖型の一候補と考えられる。

無文土器の例は、K 135 遺跡で中型鉢が c 段階、中型深鉢が d 段階前半と e 段階にある。蘭島餅屋沢遺跡では小型深鉢が d 段階から、大中型深鉢が d から f 段階にある。フゴッペ洞窟で d から f 段階前半にある。本遺跡では図 VII-3-15 が e 段階後半～f 段階前半の例がある。

無文化は c 段階の後北 C₂・D 式の鉢に始まり、続いて d 段階に大中型深鉢に起こり本格化する。それは北大 I 式において注口・片口に及ぶ。後北 C₂・D 式後葉に始まる有文土器と無文土器の 2 系は、北大 II・III 式にも引き継がれる。

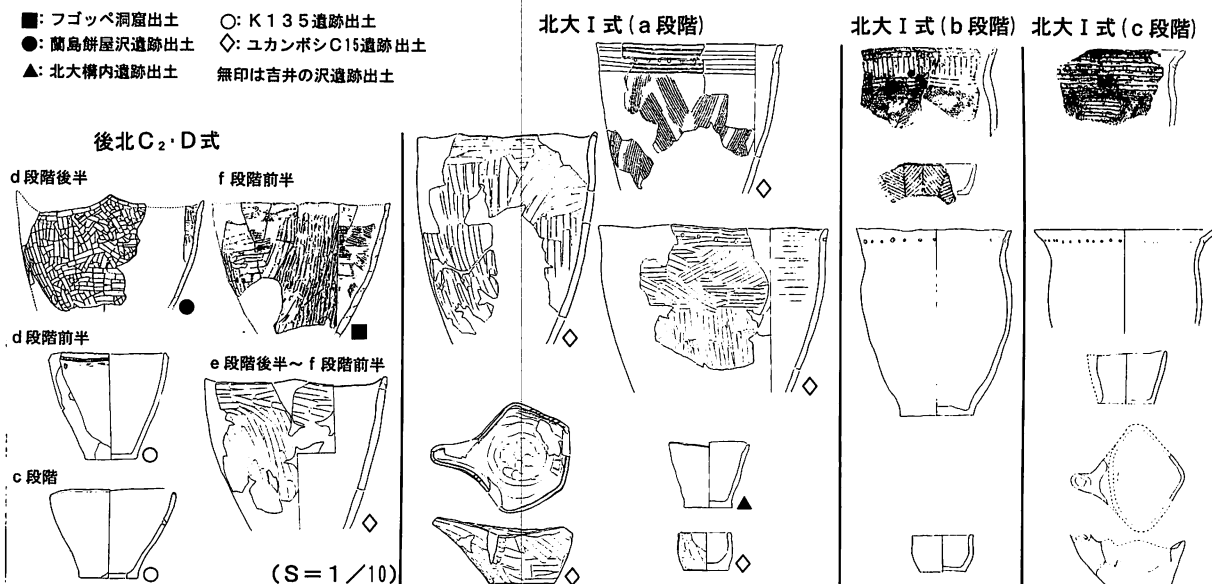


図 X-7 VI 群 c 類無文土器の変遷

(7) 土坑墓等出土の土器 (図 X-8)

1. 坏の変化について

ユカンボシ C 15 遺跡の坏は全て非ロクロ成形技法で、平底気味の丸底と平底がある。平底気味の丸底には、内底面が放射状ミガキで内外面に段があり、体部は内弯するものと、段が痕跡的となって凹み、体部が内弯するものがある。平底には体部中位の内外面に段があるものと、体部中位に沈線があるものがある。このような特徴の類似は下記の遺跡においても見られる。

末広遺跡 I H-11 の坏は全て非ロクロ成形技法で、内外面に段を巡らし、やや丸底気味である。末広遺跡 I H-80 の坏は非ロクロ成形技法で、内外面に段を巡らし、平底気味の丸底で体部は内弯する。末広遺跡 I H-31・52 の坏は全て非ロクロ成形技法で、形態は平底に近い。底部と体部の屈曲部分が凹み、体部は内弯する。末広遺跡 I H-62 の坏は全て非ロクロ成形技法で、形態は平底。以上の特徴は、丸底から平底への変化に伴い、内外面に段(丸底気味)→内外面に段(平底気味の丸底)→屈曲部分が凹む(平底に近い)→平底へと変化している。

2. 甕の変化について

ユカンボシ C 15 遺跡の甕は、頸部の段状沈線が肩部と口縁部に数本ずつあるもの、それが多条化したものがある。段状沈線が肩部と口縁部に数本ずつあるものには、口縁部が発達するものと発達しないものがある。このような特徴の類似は下記の遺跡においても見られる。

末広遺跡 I H-11・80 の甕は、少ない段状沈線が肩部と口縁部に分かれてあり、口縁部が発達するものと発達しないものがある。末広遺跡 I H-52・47・62 の甕は多条化したものと無文のものがある。以上の特徴は、少ない段状沈線が肩部と口縁部に→肩部と口縁部に多条化した段状沈線→頸部全面を覆う沈線へと変化している。

3. 球胴甕の変化について

ユカンボシ C 15 遺跡の球胴甕は、頸部の沈線が多条化し、最大径が胴部上半にあり、器高の割に最大径が小さく球胴的でない。このような特徴の類似は下記の遺跡においても見られるのだろうか。

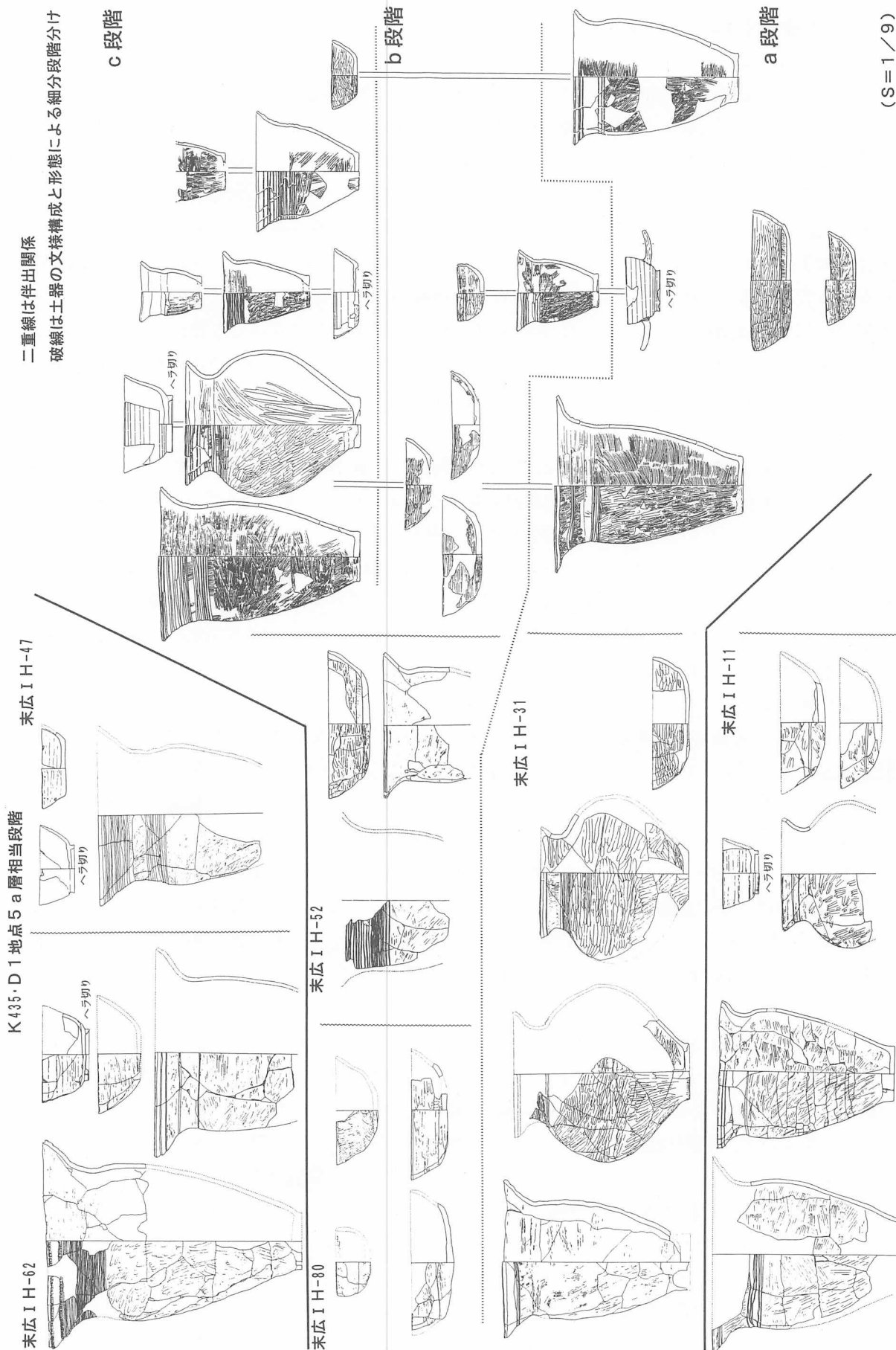
末広遺跡 I H-11 の球胴甕は頸部に段状沈線がまばらにつく。I H-80 の球胴甕は段状沈線肩部と口縁部に数本ずつあり、最大径が胴部中央にあり、器高の割に最大径が大きい。外面のミガキ方向が上半がヨコ、下半がタテとはっきり分かれる。段状沈線の多い個体のほうが最大径が上部にある。

以上の特徴は、甕の変化から類推すると、ユカンボシ C 15 遺跡と末広遺跡の例で時間差を表している。頸部に段状沈線がまばら→段状沈線肩部と口縁部に数本ずつ、最大径が胴部中央→段状沈線が多条化し、最大径が胴部上半へと変化している。

4. 須恵器について

ユカンボシ C 15 遺跡の須恵器は生産地が未確定であるため、詳細な年代の決定は難しい。産地を東北地方に求めた場合、ヘラ切り高台付き須恵器坏・底部ナデ調整須恵器坏は、8 世紀後半から 9 世紀前葉の間に位置付けられ、秋田城出土の編年試案(小松正夫、日野 久、西谷 隆、伊藤武士：1997 年)によれば、形態と技法から 8 世紀第 4 四半期～9 世紀第 1 四半期にしばらく込まれ、伊藤武士、利部 修、日野 久氏のご教示によれば、8 世紀第 4 四半期の可能性が高い。

双耳須恵器坏は 8 世紀後半から 9 世紀後葉の年代が与えられている。秋田県内では 9 世紀代に焼造されている。耳の付く位置は、末館窯跡・I 号窯(1963 年)が体部中位、富ヶ沢 B 窯跡・SJ 101(1992 年)が体部中位、富ヶ沢 B 窯跡・SJ 102(1992 年)が体部上位と竹原窯跡・SJ 01(1991 年)口唇部で、いずれも耳が坏部の体部中位～口唇部についている。村田晃一氏に実見していただき、耳の位置が焼造時期(下位：古→上位：新)を示すこと。そのことから本遺跡の双耳坏、8 世紀後半の可能



図X-8 土坑墓等出土土器の時期

性が高いというご教示を受けた。同氏報文（1996年）によると秋田県よりも古い例がある。宮城県黒川郡大衡村、彦右エ門橋窯跡・SK 1（8世紀後葉～9世紀初頭）の例で耳は坏部の体部中位に付いている。いずれも本意遺跡例より後出的な形態であり、8世紀後葉よりも以前と考えられることから、本遺跡例の年代は妥当で、生産地は古い例のある宮城県あたりに求められるのかもしれない。

5. 段階の設定と暦年代

- c段階：平底坏、沈線が多条化した甕、沈線が多条化し、最大径が胴部上半にある球胴甕
- b段階：屈曲部分が凹む（平底に近い）内弯坏、少ない段状沈線が肩部と口縁部にある甕
- a段階：内外面に段（平底気味の丸底）の内弯坏、少ない段状沈線が肩部と口縁部にある甕

c段階は末広遺跡ⅠH-47・62と同じ坏・甕・ヘラ切り高台付き須恵器坏を持つ。これら共通点は時間的に近接していることを示しているが、新しい要素だけを拾いあげると外面がミガキで頸部全面を覆う沈線の甕、糸切り須恵器坏がある末広遺跡ⅠH-62・47はc段階より新しい。a段階は末広遺跡ⅠH-80と同じ組成（坏・甕）を持つ。b段階は末広遺跡ⅠH-31・52とほぼ同じ坏を持つ。

以上より、a段階→b段階→c段階という順序が成立する。a段階は、内外面に段（平底気味の丸底）の内弯坏があるⅠH-80と併行する。c段階は、頸部全面を覆う沈線の伴う甕がある末広遺跡ⅠH-62・47よりも若干古い。豊田宏良（1997年）は須恵器との共伴関係より、末広遺跡ⅠH-62・47を9世紀前葉、末広遺跡ⅠH-11を8世紀中葉と推定している。したがって、a～c段階は8世紀後葉～8世紀末の暦年代が与えられる可能性が高い。（鈴木 信）

4. 擦文文化期の墓

(1) 土坑墓について（図X-9、表X-3）

1. 土坑墓の構造など

土坑墓内に骨・歯は遺存していなかった。また、袋状土坑や小柱穴などの付属施設も持っていない。壁は直線的で外傾しながら立ち上がるものが多い。平面形は隅丸長角形（P-3・9・12・27）、小判形（P-2・17・29）、短い小判形（P-14・30・31）、長い小判形（P-8・28、X-1・G4）、幅の広い長方形（X-1・G2）、幅の狭い長方形（X-1・G1・3）がある。

隅丸長方形・小判形は後北期から続く伝統的な平面形である。長い小判形・長方形は本遺跡例をさかのぼる時期の類例がないのでこの頃に始まる平面形であろう。長い小判形の継続する例として9世紀前半の千歳市末広遺跡（1981年）ⅠP-57があり、より長くなった伸展葬墓が擦文文化期中後期

表X-3 土坑墓等の分類要素一覧

遺構名	長軸方向(°)	長径(cm)	平面形態	副葬品(墓坑内・棺内)	副葬品(墓口脇)
X-1・G4	-22	116	長い小判型		
P-3	+12	(125)	隅丸長方形	礫 (3個)	
X-2	+20	(230)	—	小刀	
X-1・G1	+25	108	長方形	頁岩礫	
P-8	+25	142	長い小判型		
P-17	+32	98	小判型		
P-14	+33	101	短い小判型		
P-29	+41	98	小判型	坏・ミニチュア甕	須恵器双耳坏・敲石
P-28	+41	141	長い小判型		小型甕・ミニチュア甕
P-27	+45	148	隅丸長方形	大型坏・刀子・鉄素材	
X-1・G2	+46	109	長方形		
X-1・G3	+51	—	長方形		
P-9	+53	145	隅丸長方形	手斧・鎌	
P-30	+53	61	短い小判型	坏	小型甕
P-31	+54	56	短い小判型		須恵器坏・ミニチュア甕
P-12	+63	(120)	隅丸長方形	坏・刀子・斧・鎌	
P-2	+67	(132)	小判型		

※長軸方向は真北から西に振れるものは正数、東に振れるものは負数で示す。